

50周年記念特集「新しき」を知るために

「化学と教育」誌はその前身を含め本年度50巻を数えることになった。年に1度の講演会の要旨集から出発した本誌も、化学教育への興味と期待の高まりにあわせるようにして、隔月刊の専門誌となり、現在は毎月会員や学校へ情報を送るに至っている。発刊半世紀をむかえた記念として、またこれを今後への大きな節目とするために「化学と教育 古きをたずねて新しきを知る」と題した特集を今月号から数号にわたって掲載することになった。編集委員内外のメンバーが中心となって、企画の内容を一から考えて特集をつくったが、作業の過程であたたかい御協力や御支援を得ることがしばしばであった。無理をきいていただいた先生方をはじめ関係者の方々、ありがとうございました。

特集の中味については、ここではふれないで、本号以降を読んでいただくお楽しみにさせていたいただきたい。企画にあたっては2つのことを念頭においた。第1に「古きをたずねる」ことは重要であるにしても、これをぜひ「新しきを知る」につなげる内容にしたいと考えて工夫をこらした。第2には教育に実際にたずさわっている人（といっても多様なのでまとめて一つというわけにはいかないが）の目線に重きをおいて企画立案をおこなった。企画委員には多くの中学高校の先生に参加していただき、アイデアをいただくとともに議論や作業にいっぱい汗をかいていただいた。

この特集を企画する過程で、本誌のバックナンバーを開いてみたところ色々新しい発見があった。浅学であるうえに古い巻の本誌を目にするのはじめての筆者にとっては、化学教育のスタンダードとして現在定着している事柄が、日本では本誌の草創の頃に急速にかたちづくられたことや、その後これが変遷していった経過などは大変興味深いものであった。教える側以外の多くの人にとっては、教育といえども思い浮かぶのは自分自身のものであるからか、教育のスタンダードが変わるものだということがすら実感しにくい。まして、これを時間軸に沿ってふりかえり考える機会はめったにあるものではない。今後、教育の内容がダイナミックに変わってゆくのか、これまでのものの良いところ（とそうでないところも？）を保ち続けるのか、人や場所によるスタンダードの違いをこれまでよりもっと際立たせるのか、など今後とも関心をもち続けていきたい。

本誌の古い巻号の化学・教育用の実験の記事もおもしろかった。いきいきとした著者の思い入れが読者に伝わる記事が多い一方で、内容に古びたところがなく、むしろ今でも使えるのでは、という考えや手法を含むものも少なくない。例えば本誌で昨年より掲載されているマイクロスケール実験は新しい教育実験として好評を博しているが、すでに40年前の

本誌にも1報ごく短い記事に、小さなスケールでの実験が掲載されている。当時はフラスコやビーカーを使うことこそが化学実験で、これを学ぶことに重点がおかれていたからであろうか、教材としての関心は得られなかったようである。40～50年前といえば、私たちの衣食住、仕事、遊びを含めた毎日が今と全くちがっていたといって過言ではない。この間の大きな生活や科学技術の変化にもかかわらず、教育実験が常に新しくありつづけてみえるのは、何を見せるのか（やらせるか）ということのみならず、どのように見せるか（やらせるか）という点が教育実験の本質であるからかもしれない。もちろん、関係者の不断の努力と工夫がその地位を保つに大きな役割を果たしていることはいうまでもない。

長い間、私達の仕事に密接にかかわってきた専門誌の形態に変化があらわれたのはごく最近である。世の中の学術雑誌は電子化の波にあらわれ、最初は整理、保存用として磁気ディスクなどの媒体に格納された「文献」が、積極的に検索に用いられるようになった。今ではインターネットの中で文献をさがし、読むというスタイルが急速に広がっている。特に専門学術の文献には短期間で内容が古びるものが多いために、印刷された雑誌を買うことはもちろん、図書館でコピーをとる、などというやり方すら、若い研究者の情報収集ではやや非効率な方法になってしまっている。実は、本誌の情報電子化は雑誌電子化の波がはじまるずっと前からおこなわれ、献身的な先生方の手作りの仕事で、ディスクとして整理され、公開されてきたのは御存じの通りである。学術情報誌とは性格を大きく異にする本誌について、これからのベストの形態を、急ぐことなく長い目でさがしてゆきたいものである。

それでも、5年後には高校生もそれから先生も、授業の実験の前にはケータイで「化学と教育」の実験記事のデータベースをのぞいたりするようになるのだろうか。10年後にはアニメ化された世界中の化学教育の情報を本誌のサイトからたちどころに入手できるようになるかもしれない。50年後は？ これに答えることはとてもむずかしい。少子化が進んで、社会の枠組みが大きく変わっても、その姿形はどうあれ本誌が化学教育とともに存在意義をずっともち続けてほしい、というのは私達化学にたずさわるものにとっては共通の願いであろう。50年後に、発刊100周年を記念した特集をやろうということになったときに、「半世紀前の“化学と教育”は紙で印刷してあるけど中身はすごくいいねえ」と評価されるように、本誌の現在の内容を充実するよう日々努めたいものである。

小坂田耕太郎

化学教育協議会・化教誌編集委員会委員長